

論文要旨

題：「日本語のAspectと関わる補助動詞についての研究」

大場（西村）美穂子

本論文では、テ形接続の補助動詞の中の、Aspectと関わる「いる」「ある」「おく」「しまう」「いく」「くる」の6つについての記述的研究である。

第1部では、補助動詞「いる」の用法および研究史を述べている。

第1章では、「いる」の用法を検討した。「いる」の用法は、以下の3つである。

1. 前接動詞の表す動きの過程と参照時が、同時的であることを表す
2. 前接動詞の表す動きの完了後の状態が、参照時と同時的であることを表す
3. 前接動詞の表す動きが、参照時には完了していることを表す（前接動詞の表す動きが参照時と継起的関係にあることを表す）

これら3つの用法は、先行研究において、1と2の関係が深いと言われることが多かったが、本動詞「いる」との関係で見た場合、1と2よりも、2と3の方が関係が深いということを示した。

第2章では、補助動詞「いる」の研究とAspect論との関係について述べた。「いる」の研究は、日本語のAspectをどのように規定するかという問題と関係がある。Aspectを意味的なカテゴリーではなく、動詞形態論的なカテゴリーと考える研究を特に検討し、日本語の中で動詞の形態論的なカテゴリーを立てることには問題があり、結局、日本語においては、Aspectは意味的にしか規定できないということを示した。

第3章では、上の1章2章の検討を踏まえ、Aspectの意味と関わる補助動詞の意味記述の際に留意すべきことをまとめた。

次に、第2部では、その他の補助動詞「ある」「おく」「しまう」「いく」「くる」の5つを記述している。

第4章では、「ある」を検討した。「ある」の用法は以下の2つである。

用法1：行為が行われた結果として存在する状態を述べる。用法1が表す「行為が行われ

た結果」には次の2種がある。

結果1＝行為対象が、行為の結果的状态を保って存在すること

結果2＝何らかの効果・効力が、行為の結果として存在すること

*ただし、用法1は「意志的行為」の場合にのみ用いられる。また、「忘れる」を含む前接動詞の場合は、「意志的行為」とは言えないが、用法1の意味で用いられる。

用法2：行為そのものが維持されていることを述べる

*ただし、用法2は「他人の意志に任せる、現状をそのまま維持する」という意味を持つ行為の場合にのみ用いられる。

第5章では、1章と4章の検討をもとに、「いる」と「ある」を比較した。その結果、「いる」と「ある」には、次のような違いがあるということが分かった。「いる」によって述べられているのは、前接動詞で表された動きと参照時との純粋な時間的關係である。一方、「ある」によって述べられているのは、前接動詞で表された行為によって生じる直接の結果や、効果・効力など、具体的な事象である。

第6章では、「おく」を検討した。「おく」の用法として、以下のように、基本的な用法2つと例外的用法1つを認めておきたい。

用法1：行為の完了に伴う事態を考慮した上で、行為の完了についての責任が行為者にあるということを表す。

〈後の事態1〉：当該の動作の完了に伴って生じる直接の結果

〈後の事態2〉：当該の動作の完了に伴って生じる間接的な効果・効力

*用法1は、意志的行為を表す場合に限られる。

用法2：行為の継続に伴う事態を考慮した上で、当該の行為を継続させることの責任が行為者にあるということを表す。

*用法2は、他人の意志に任せる、現状をそのまま維持するという意味を表す場合に限られる。

例外的用法（従属節内でのみ現れる用法）：行為の完了に伴う事態を考慮した上で、行為の完了についての責任が行為者にあることを表す。ただし、この場合、意志的行為でなくともかまわない。

以上より、「おく」は、「行為によって生じる事態を考慮した上で、その行為の責任が行為者にあることを表す」と言うことができる。

第7章では、「ある」「おく」を比較した。その結果、「ある」と「おく」には、それぞれの例外的な用法を除けば、並行的な関係が認められることが分かった。

第8章では、「しまう」を検討した。「しまう」は、先行研究ではアスペクトと、話し手の感情の両方に関わる補助動詞であると言われて来たが、積極的にアスペクトを表すとは認められず、また「しまう」に伴う話し手の感情は、「それまでに存在する「山場」が終結する」という「しまう」の意味から生じるものであるということ述べた。

第9章では、「おく」と「しまう」を比較した。この2つは、完了というアスペクト的意味と関わると言われて来たが、「おく」と「しまう」とが完了を表すようになるしくみはそれぞれに異なっており、両者を積極的に対立させて述べる必要はない。

第10章では、「いく」「くる」を検討した。先行研究では、空間的用法と時間的用法の2つに分けるのが普通だが、本論文では、この2用法の他に心理的な接近を表す用法が「くる」に認められることを述べた。また、「いく」「くる」は「基準点を置く」という側面を中心に議論されてきているが、時間的用法には、「基準点を置く」という側面の他に、漸次性という特徴が重要であることを述べた。

第11章では、10章までの検討から、先行研究でアスペクト的意味とされてきたものは、おおよそ3つに分類可能であることを述べた。

1つは、「いる」に見られたような、「参照時と前接動詞が表す動きとの時間的關係」を表し分けるものである。これは、最も純粹に、時間展開の表し分けと関わる。このことは、先行研究で、「いる」が、アスペクト的意味を表す形式の中でもっとも基本的だと言われて来たことと関わる。ただし、「いる」が、文法形式として、他の形式より優位にあるという主張には、根拠がなかった。

もう 1 つは、「ある」「おく」「しまう」の 3 つに見られるような、前接動詞の表す動きとその他の何らかの事象との関係を述べるものである。「ある」は、前接動詞の表す動きによって生じる結果を、前接動詞が表す動きとの関係で述べるものである。「おく」は、前接動詞が表す動きそのものを、その動きの結果生じる事象との関係で述べるものである。また、「しまう」は、前接動詞が表す動きをそれ以前の状況と結びつけて述べるものである。ただし、「ある」「おく」「しまう」の 3 者は、「時間的」関係を述べることが重要なのではない。

そして、最後の 1 つは、「いく」「くる」に見られた、前接動詞が表す動きが時間的にゆっくり進み、しかも、その動きをある一定の方向から認識するということを表すものである。上の 2 つのタイプのアスペクト的意味が、当該の事態と何かの関係を捉えるものであったのに対して、「いく」「くる」の表す漸次性という特徴は、当該の事態 1 つについて述べているという大きな違いがある。